滋賀・金剛寺城跡

1 所在地　滋賀県近江八幡市金剛寺町小字大手
2 調査期間　一九八二年（昭57）一二月
3 発掘機関　滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会
4 調査担当者　近藤　滋・山崎清和（近江八幡市）
5 遺跡の種類　城跡
6 遺跡の時代　室町時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は県営ほ場整備事業に先立ち実施した発掘調査である。調査は小字「古城」の地の南約三〇〇mの地点で実施したが、これは小字「大手」の名と、ここに所在する若宮神社の周辺に、堀跡様の水路があることから、城跡の明確な位置確認と、堀跡であるのかどうかの遺構確認を目的としたものである。

（近江八幡）

調査の結果、堀跡様水路は旧自然河道を耕作用水路に改変したもので、特に遺構としては認められなかった。ただ遺物としては旧河道最下層より古墳時代前期～中期の土師器片が多数検出され、この上層の氾濫に伴う砂層より、近世の陶磁器片と、若干近江産黒色土器の検出を見た。ここに報告する板塔婆は、流れの中の径六〇cm、深さ五～七cmの皿状窪地より出土したもので、隣接地より黒色土器片が出土したというだけで、具体的な伴出遺物と言い難く、時期決定はでき難いものである。なお参考までに、当該地周辺は佐々木氏頼が亡父時信の菩提のため正平七年（一三五二）金剛寺を建立し、また、延慶三年（一三一〇）に没した佐々木頼綱が金田殿と呼ばれた別館を建て、延徳三年（一四九一）には細川政元の臣安富元家が金剛寺城を築いたことが、諸文献により知られている。

8 木簡の釈文、内容

検出した木簡は大きく分けて三片あるが、内二片は同一個体のもので、一片は木目から見て、あるいは別個体の可能性もある。文字の判読できるものは一点である。

(1)　・□陀　　(61)×39×3　081

・□□□□□□□□

（近藤　滋）